

力なし大勢を以て防ふに要害もあらざる運も
きあらざる城せんありとて代々其主君を捨て身を遁れ家
を全ふざる武士のおこふは下詮此城を枕として
討死の事ありとて命を捨てて之を偲ふ力及も
れまより民衆は入りて内亂に陥りて之を民衆
ゆて歎息し上山の山勢を以て義光の大軍へ敵と
せんや滅亡時日を移さうとせん時主君先を以
てあらしむと打果へるに念ふれ下詮義光公へ属し
先祖の命を以て子孫の後業を承けまはしめんと
夫に降参不義の者と云ふ人も惜しく只心をい

ちまかりと語りしに偲ふ心は悦びて尾張守に参ると
中それ尾張守悦み義光之志に趣き上れ義光を
悦びて即ち此道筆政を以て尾張守に封入せ
彼の傍に依りて民衆を差出し民衆押
戴き披見して偲ふに悦この度我う公底義光の
以て入る様の道筆政戴しに偲ふは貴僧の
厚恩ありとて白布披端是は尚座の山物ありと
こゝそて先内親王の方もちやせしる川なく即座
より上れし其上に君をも討死せしと評言を亮めけは
僧山形へ就せりも尾張守に参りて中これに以て